

まえがき

昭和五十四年、『消えゆく山人の記録 マタギ』が翠楊社から刊行された。著者は秋田県角館町（現・仙北市）生まれで、秋田魁新報の記者、角館支局長を務めた太田雄治さん（大正二年生まれ、故人）。東北地方の山間に暮らし、山の神を信仰した半農の狩猟民、マタギの謎を追って、三十余年にわたり各地のマタギ集落で採集した資料や習俗、山言葉（マタギが山で使う言葉）を集大成し、途中、版元を変えながらも、版を重ねた名著である。私のマタギとの出会いは、太田さんとの出会いから始まった。

大正末から昭和にかけて、角館には柳田國男の民俗学や澁澤敬三を中心とするアチック・ミューゼアムの運動や研究に参加するグループがあつた。角館在住で民俗研究家の武藤鉄城、富木友治、富木隆蔵、太田雄治らが精力的に活動していた。

昭和四十七年、角館の歴史や民俗・文化を紹介するタウン誌『里 かくのたて』の編集人だつた太田さんから、表紙や口絵の写真の依頼があり、それから太田さんとの交流が始まった。あるとき太田さんから、山形の地方出版社にマタギの原稿を預けているが、数年も棚上げになっているという話を聞いて、東京の知人の出版社（翠楊社）を紹介したところ、出版が決まった。私がマタギの資料写真の撮影に協力することになり、太田さんと同行して秋田・岩手県内のあちこちで撮影を続けた。もともとマタギには興味はなかつたが、しだいにマタギと民俗学の虜になり、マタギに同行取材を重ね、さらに興味が増し、深入りしていった。

マタギは私の取材に際し、次の約束を提示した。

- 一 ブツパ（撃ち手）が一発銃を撃つまでシャッターを切つてはならない。
- 二 クマが勢子（追い手）に追い上げられて来る間は身動きしてはならない。
- 三 声を出してはならない。

四 ブッパの側にいてクマが来るのを待つこと。

五 仕留められたクマにすぐに近づいてはならない。クマが死んだふりをして、急に襲いかかる場合もある。

この条項を厳守することを誓って、昭和五十七年から平成二年までの九年間、各地のマタギの狩りや行事に参加し、撮影を続けた。マタギは「山をまたぐ」が語源と言われるほどよく歩き、一日十kmや数十kmは当たり前だった。最後の伝統マタギである百宅^{ももやけ}マタギ、玉川マタギのところには、それぞれ十回、二十回と通い、狩り、ケボカイ（皮はぎの神事）、熊祭り、山の神祭り、小屋がけ、火起こし、昭和初期の装束や猟具などを記録した。

伝統を引き継ぎ、シカリ（マタギの頭領）のもとで山を駆けめぐったマタギたちは、ほとんど故人となってしまった。時代は変わり、クマ狩りはハンターのスポーツとなり、山や獣たちにマタギたちが持っていた畏敬の念も、風習も消えてしまった。山も姿を変え、人々の記憶からマタギたちの真実は失われてしまった。玉川集落は平成二年に玉川ダムに水没し、百宅集落も鳥海ダムの建設により消えようとしている。

残念ではあるが、時の流れはあまりに急で休むことがない。まして再びあの姿を見ることはないだろう。撮りためた写真を元に、かつて山を生活の場としたマタギたちのことを残しておきたいと思い、写真を整理し、筆をとった。時代が進み、振り返るときが来たときに、この記録がささやかな足がかりになれば幸いである。



小屋がけ

↑①直径約50cmのヤシ(サワグルミ)の木をノコギリだけで伐る。刃渡り30cmほどだが、やたらよく切れる。左右両側から刃を入れて、あっという間に伐り倒した。

←②鉋で皮に切れ目を入れ、ツクシ(先端がクサビ形の棒)ではがしていく。皮の長さは約1.2m。持ち歩く道具は最小限で、ツクシもその場で作る。

野営するときの小屋の作り方。昭和六十年頃、門脇隆吉さん、田中源之助さんが再現してくれた。場所は大深沢の大岩が突き出したところ。手持ちの道具は鉋とノコギリの二つだけ。

まずツクシという道具を作る。手で握れる太さの木を切ってきて、片方の先端をクサビ形に削ったもの。

次に直径約50cmのヤシ(サワグルミ)の木をノコギリで伐り倒し、鉋で長さ一・二mほどのところに切れ目を入れ、ツクシで皮をはがしてゆく。面白いほど簡単にはがれる。これを屋根材にする。

ほかに、柱にする長さ5mくらいの丸太を三本、柱に横掛けする木を四、五本、材をつなぐヤマブドウのツルの外皮を採ってくる。

ヤマブドウの皮は縦方向の力に強く、適度な太さに引き裂いて、丸太の骨組みやヤシの皮をくくりつけるのに使う。あとの材料は、笹の葉だけ。

傾斜の付いた大岩に、三本の丸太を立て掛け、これに細めの横木を四、五本、ヤマブドウの皮で固定する。その骨組みの上に、ヤシの皮をヤマブドウの皮でくくり付けて屋根板とし、その上を笹の葉で覆う。

笹の葉は根元を上にして取り付ける。逆さにするのは、雨水が切れやすく、下に流れやすいからだ。

小屋の中の岩のそばで火を焚くと、岩が蓄熱し、朝まで暖かいそうだ。

三年後に行って見たら、雪にも風にも耐えていた。



④ヤシの皮で屋根を葺く。皮は2段重ね。岩屋やヤシの木がどこにあるか、マタギは知っていた。



③木を組んで、ヤマブドウのツルの皮で留める。

→⑤雨が入らないように笹を下向きに重ねて留めていく。ヤシの皮の戸を付けて完成。



↑小屋の中で酒を飲む門脇シカリと源さん。煙は天井から抜ける構造のため、煙たくない。



→小屋の中で飯作り。火を焚くと岩に蓄熱され、朝まで暖かい。ロシアのレンガ製暖炉ペチカと同じ原理。